

クラッシュ・ブレイズ

ファロットの休日

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

DTP 挿口
P 画 絵
ハンズ・ミケ 鈴木理華

レティシアの場合



1

与えられた難しい課題をほぼ終えて一息ついた時、レティシアと同じ班で実験していた女学生の一人が妙に遠慮がちに話しかけてきた。

「ねえ、レット。——ニコラに会った？」

久しく忘れていた名前である。

ちよつと驚いて、レティシアは眼を見張った。

「いんや。会ってないけど、なんで？」

「この前、あたしに連絡してきて、あなたのことを訊いてきたの。会いたがってるみたいだったから、今日の授業のことも話したんだけど」

彼らがいるのはセム大学の医学部教室だ。

ニコラ・ペレリクは十四歳。まだ中学生の歳だが、十二歳でセム大学に入学したほどの秀才で、以前は

彼らの同期生だった。

しかし、彼はある事件が原因で大学をやめている。以来、ニコラの話は彼らの間で上ることはなく、ニコラのほうもセム大での学生生活は思い出したくないはずだったが、別の男子学生二人が言った。

「ニコラならついさつき構内で見かけたぜ」

「ああ、俺も見たよ。声を掛けようとしたんだけど、何か避けられてるみたいで、ちよつとな……」

「無理もないよ。あんなことがあった後じゃ……」

「しっ！」

セム大学ではその事件のことは『禁句』である。何よりレティシアがその事件の被害者だったから、みんな気遣うような眼でレティシアを窺った。

レティシアは困ったように苦笑しながら、努めて感情を抑えて淡々と言ったのである。

「それは多分、逆だったんじゃないかな。俺の顔を見たくなかったんだよ。嫌われてるとかじゃなくて、会えばいやでも思い出しちゃうだろ」

一同さらに気まずい顔になった。話を持ち出した女学生に非難の眼差しが集中する。

いやな空気が漂ったが、レティシアは自分でその空気を笑い飛ばした。

「そりゃあ俺だつてさ、あの時はせっかくの男前がこれで台無しかって相当がつくりきたもんだけど。見ての通りきれいに治つたんだ。気にしなくたっていいのにな。もう終わつたことなんだから」

これで場が和み、みんな実験に戻つたのである。まだちよつと気まずそうな顔の件の女子学生が、そつとレティシアに話しかけた。

「レットは強いね」

「そんなことねえよ。ちよつとばかり立ち直るのが早かつただけさ」

「かもしれないけど、それだけじゃないよ」

少し前、失業者ばかりが四人、次々に殺害され、解剖された無惨な姿で発見された事件がある。

世間を震撼させた連続猟奇殺人事件だ。

犯人はあろうことかあるまいことか、セム大学の医学生四人だった。彼らは自らの解剖実習に備え、生きた人間を使って文字通り『実験』したわけだ。レティシアとニコラはその犯行現場に居合わせ、ニコラは犯人の一人に足を撃たれた。

レティシアも顔や肩、腹を斬られ、特に腹の傷は緊急手術が必要なほどの重傷だった。

犯人たちがそこで仲間割れを起こさなかつたら、彼は確実に五人目の犠牲者になっていただろう。

警察からこの衝撃の事実を聞かされたセム大学が受けた打撃は計り知れない。

自校の学生が人を殺害しただけでも一大事なのに、よりにもよつて医学部である。人の命を救う医者になるべく学んでいる学生たちが自らの実験のために四人もの人の命を奪つたのだ。

しかも、これだけでは終わらなかつた。

レティシアは偶然その場に居合わせた被害者だが、ニコラは違う。彼は加害者の一味だったのだ。

ただし、ニコラは自分の本意ではなかったのだと、他の四人に脅おどされて逆らえなかつたのだと訴えた。

問題の四人はいわゆる名家の息子である。

特に主犯格のデューク・デュプリンは医学部でもひとときわ目立つ成績優秀な生徒だった。

自信家のデュークは実験材料を確保するために、傭兵ようへい上がりの男たちを四人も雇よとっていた。ところが、男たちの一人がその事実を材料ネタにして、デュークの親を脅せば大金が手に入ると考えたのが発端となり、醜みにくい仲間割れが起き、その結果、八人が殺し合う凄惨せいさんな事態となったのである。

唯一生き残ったニコラの口から、これらのことが詳細に語られ、セム大学当局は今度こそ頭を抱えた。ニコラも無論、警察に事情聴取された。

十二歳で大学に入った秀才だけあって、ニコラは利発で、ちよっぴり背伸びしている性格である。

六歳も年上の同級生に負けるものかという自負もあつたろうが、体格だけはどうしようもない。

「逆らつたら……真つ先にぼくを解剖してやるつて。それで……どうしようもなかつたんです。先生にも誰にも言えませんでした」

ニコラは真つ青な顔で語つたが、警察はこれでは納得しなかつた。脅されて仲間こうざくにされたと言つても、彼は拘束こうざくされることもなく自由に行動していたのだ。最初の犠牲者が発見されてから四人目の殺害までかなりの日にちが空いている。その間になぜ助けを求めなかつたのかと警察官は疑問を投げた。

「それは、いつも四人のうち誰かがぼくの側にいて、見張られていたからです」

「しかし、きみは夜には自宅に戻つていたんだらう。四人はきみの家まで押しかけたわけではないはずだ。どうして自宅から警察に連絡しなかつたんだ？」

「無理ですよ、そんなの！ アンディはお父さんの警備会社の設備を自由に使えるんです。自宅からの通信も盗聴されていたかもしれないし、ブラッドとマットの父親は警察上層部の人間だし、デュークの

父親なんか大学の理事なんですよ！」

「それを言うならきみの父親もかなりの有力者だぞ。ご両親に打ち明けようとは思わなかったのか？」

「そんな！　どんな仕返しされるかわからないのに、そんなこと恐くてできませんでした」

警察というのは人を疑うのが商売である。

どんなに被害者になりすまそうとしても、熟練の警察官の眼を欺けるものではない。演じているのが十四歳の少年ならなおのことだ。必ずほろが出る。

しかし、その彼らが見てもニコラが激しい衝撃を受けていること、病院に収容された後も本当に怯えてきつて震えていたのは疑いようがなかった。

デュークの脅迫を受け入れたのは彼の弱さだが、大学でも一目置かれるデュークを含む四人に脅され断れば殺されるところまで追いつめられた。こんな状況に置かれた十四歳の少年に、なぜそんな脅迫に屈したのかと責めるのは酷というものだ。

幸いというのも変だが、ニコラは手先に使われて

ただけでまだ誰も殺してはいないのだ。

それなら十分やり直せる。

セム大医学部の学生たちもニコラに同情した。

全員が未成年ということで犯人の名前も学校名も伏せられたが、医学部の学生たちはいやでも事件の真相を悟った。悟らざるを得なかった。同じ授業を受けていた同級生が四人、揃いも揃って変死したとなればどういう意味か考えるまでもなかったのだ。

ただし、その学生たちも、ニコラが加害者の一味だったことは未だに知らない。

レイシアと同じ被害者だと思いついでいる。

ニコラがやむなく事件に荷担していた事実は大学側と警察の配慮に加え、ニコラの父親の強い要望によつて公表されず、唯一、事情を知るレイシアも沈黙を守ることに同意したからだ。

この経緯を知らない学生たちはニコラを気遣って、お見舞いの手紙を送った。事件のことは忘れて早く戻ってきてほしいと励ましの言葉を掛けたが、何も

知らない同級生の気遣いが逆に重圧プレッシャーになったのか、ニコラは入院中の病院から退学届けを提出した。

それを聞いた医学部の学生たちは残念に思ったが、無理もないと納得もした。この場所に戻ってくれば、死んだ四人のことをいやでも思い出してしまふ。

自分を殺そうとした犯人が、どんな顔をしていたか、かつて彼らと何を学んだか、何を話したか、記憶は鮮やかに生々しく、どこまでもついて回る。そんな日々には耐えられないと思っても恥ずべき点は何もない。第一それでは勉強になるわけがない。

むしろ心機一転、新しい場所での再出発を選んだニコラの決断を同級生たちは密かに応援していた。

だが、レティシアは完治すると大学に戻ってきた。さすがに当初は表情も硬く、ぎこちなかったが、彼は淡々と元の生活を取り戻す努力をし、同級生も全面的にレティシアを支援したのである。

こうした経緯があるものだからニコラを見かけた男子学生が声を掛けるのを躊躇ためらったのももつともで、

それはニコラにとつても同じことが言える。大学に顔を出せるようになっただけでも上出来だ。

一方、レティシアは別のことを考えていた。

ニコラがどんなつもりで自分の予定を尋ねたのか謎だが、女学生の言うようにニコラがレティシアに会いたがっているということはあり得ない。

恐らくニコラは今になって、何かの理由で大学に顔を出す必要に迫られたのだろう。しかし、まかり間違つてもレティシアとは顔を合わせたくない。

そこで昔の同級生に連絡して、レティシアがいつ大学にいるのかを確認したと考えると筋が通る。

しかし……と、レティシアは首を傾かしげた。

そこまで手を回しておきながら自分が大学にいる時間帯に構内をうろちよろしているとは、ずいぶん半端な真似をするものだ。

ぱったり顔を合わせたらどうする気だったのかと、他人事ひとごとながらおかしくなる。

それきりニコラのこととは忘れていた。

ところが、翌日以降、ニコラはレティシアの行く先々に頻繁に姿を見せるようになったのである。

と言つてもレティシアだから気づいたのであつて、常人なら気配すら感じ取れなかつただろう。

ニコラ本人も気づかれないうちに十分に用心しているようで、いつも黒塗りの車の中にいた。

そこからそつと、こちらを窺っている。

これにはレティシアも戸惑つた。

顔見知りは何も言わず、近づいてこようとせせず、息を殺すように自分を覗き見ている。

これは立派に『つきまとい』『ストーキング』に該当する行為だが、レティシアは放つておいた。

気味が悪いとも鬱陶しいとも、やめさせようとも思わなかつた。

この程度で参るようなやわな神経はしていないし、ニコラの行動にほんの少しばかり興味を湧いたのも確かだつた。

進展があつたのは三日後だ。

レティシアは意外にも報道番組が好きである。

勉強の合間には映像付きでその日一日の出来事を確認しているし、昼食時にも音声のみの報道番組をBGM代わりに使っている。

セム大学の医学部を受講しているレティシアだが、本来は高校生だ。友達も多いから、昼食はたいてい友人たちとおしゃべりに興じている。

番組の音量は会話の妨げにならないくらい小さくしているが、レティシアは友人たちと会話しながら番組の内容をほぼ正確に聞き取ることができた。

彼の生まれ育つた世界において『情報』は非常に貴重なものだった。この世界も同じだが、ここでは情報の入手が極めて容易である。端末から接触するだけで最新の情報を惜しげもなく提供してくれるのだから利用しない手はない。

以前はにぎやかな酒場で呑みながら、旅人の話に耳を傾けていた。さりげなく席を替えながら、話を聞き取れる範囲に接近するのはなかなか骨が折れる

作業だったが、ここでは座ったまま国際情勢、経済スポーツ、芸能に至るまで情報を拾うことができる。熱心に耳を傾けながらもレティシアは友人たちとおしゃべりに興じていたが、騒がしい声が偶然にも揃って止んだ瞬間、ある報道が流れた。

「――昨夜、シャルル・ペレリク総合事務局次長が心臓の発作で入院しました。幸い大事には至らず、今朝には退院しましたが、しばらく安静が必要とのことです。ペレリク総合事務局次長は来月行われる予定の連邦大学総合理事選挙に出馬の意向を示していました。微妙な状況です」

友人たちはその名前に聞き覚えがあったようでしたり顔で頷きあつた。

「本命がこけたか」

「いずれは総合学長の椅子を狙ってるやり手だろ。心臓発作なんて、とんだつまずきだな」

「政治家は健康が第一だもんなあ」

連邦大学は一つの政府のようなものである。

この星を統治するのは政治家ではなく教育者だが、選挙という形を取っている以上、どんなところにも権力争いは存在するのだ。

総合学長が大統領なら、総合事務局次長は国務副大臣くらいに相当する重職だが、この役職はいわば官僚であつて閣僚ではない。

そのため議決権を持つ理事選に出馬しようとしていたところ、軽いながらも心臓発作に襲われた。

結果的に理事選の行く末に多大な影響が出たのでニュースになったのだろう。

だが、高校生の彼らには次の試験のほうが遥かに重要な問題だった。話題はすぐに他に移り、午後の授業が始まる前にみんな席を立ったのである。

レティシアも彼らと同じように教室に向かったが、果たしてこれは偶然だろうかと考えていた。

何があるうとレティシアの顔だけは金輪際見たくないと思つているはずのニコラが身辺をうろちよろするようになった途端、その父親が倒れて入院した。

否、偶然のはずがない。

この二つの間には何か関連があるはずである。

予想は外れなかった。

放課後、レティシアがエクサス寮に戻ると舎監が声を掛けてきたのである。

「ミスタ・ファロット。面会人だぞ」

「あー、はい」

誰であるかは想像がついたから生返事をする、

舎監は気がかりそうに付け加えてきた。

「いくら聞いても大丈夫だとしか言わないんだが、

あの子、どこか具合が悪いんじゃないか？」

「——そうなんですか？」

「ああ。今にも倒れそうだった。自分の足で立っていたのが不思議なくらいだよ。どうしても、きみに話したいことがあるそうだ。早く聞いてやってくれ。

救急隊が必要ならすぐに言ってくれよ」

「うーん。本人が大丈夫だって言うなら大丈夫だと思いますけど……そうですね。何かあったら大変だ。

——面会室ですか？」

「いや、どうも狭いところには抵抗があるようですね。閉所恐怖症かもしれないな。遊戯室で待ってるよ」

それは違う。狭いところがいやなのではない。

面会室ではレティシアと二人きりになってしまう。

それが耐えられないのだ。

遊戯室には大勢の寮生が集まっていた。

夕食前の一時、ここでおしゃべりしている寮生も

多いのだ。そこで待っていたのは予想通りの人物で、

舎監の言葉は決して大仰なものではなかった。

ニコラは遊戯室の片隅の椅子に座っていた。

両手で膝を握りしめた姿勢はがちがちに緊張し、

顔面蒼白、唇は土気色、両手で懸命に押さえつけて

ても膝がぶるぶる震えている。

『倒れそう』どころか『今にも死にそう』な相手に、

レティシアは至って気楽に声を掛けた。

「よう、ニコラ。久しぶりじゃん」

はじかれたようにニコラが飛び上がった。

椅子が転がって倒れる。悲鳴を上げなかったのが不思議なくらいの過剰反応だった。

胸を波打たせて大きく喘ぎながら、なぜか決して

レティシアの顔を見ようとはしない。

頑なに眼を逸らし、逃げようとする両足を必死に押さえつけているのがあからさまにわかる。

端から見てもわかるほど身体をこわばらせ、肩で息をしている男子中学生の図は明らかに異様だから、通りかかった寮生の女子がからかうように（その実ちよつと心配そうに）話しかけてきた。

「レット、何してるの。せつかく会いに来てくれた後輩をいじめちゃだめじゃない」

「ひでえなあ。いじめられてるのは俺のほうなのに。ここんとこずつとこいつに跡をつけ回されてさ。

それも立派な黒塗りの車の中からじーつとこつちを覗いてるもんだから、いやもう、焦ったの何のって。こりゃあひよつとしたら、古めかしい言い方だけど、俺って密かに思いを寄せられてるんじゃないかって、

気が気じゃなかったぜ。今だって告白されるんじゃないかって、めちゃくちゃびびってるんだから」

明らかに冗談とわかる口調に女子生徒は吹き出し、高らかに笑いながら離れて行つたのである。

一方、ニコラは真つ赤になつていた。さつきとは別の意味でわなわな震えている。

羞恥からではなく憤りによるものだ。

よくもぬけぬけと——と、よほど言いたかつたに違いない。だが、これで少しは緊張がほぐれたのか、ニコラは大きく深呼吸して、ほそりと呟いた。

「気がついてたの……?」

「おまえが俺の跡をつけ回してたことか。こつちが訊きたいぜ。なんで気がつかないと思つた」

ニコラは気まずそうな表情で押し黙り、しばらく躊躇ってから言つた。

「……話があるんだ」

「何だい?」

「ここじゃ、ちよつと……」

「それじゃあ俺の部屋に来るか？」

針で突かれたようにニコラの身体が飛び上がる。

見る間に血の気が引いていき、再び足ががくがく

震え始める。今度は正真正銘の恐怖からだ。

何とも忙しいニコラに、レティシアは内心呆れて、

顔では苦笑しながら肩をすくめた。

「おまえさあ、緊張するのはわかるけど、ちよつと顔に出すぎ。部屋がだめなら外に出るか？」

ニコラは硬い表情で頷くと、断頭台へ上るような顔つきでレティシアについてきた。

ニコラがこれほどレティシアに対して恐怖を覚え、緊張しているのには無論、理由がある。

十六歳のレティシアは一見すると小柄で細身で、陽気で明るく気さくな性格で、友人も多い。

まさにどこにでもいる典型的な少年の一人だが、その正体は殺人鬼である。

少なくともニコラはそう思っている。

仲間割れの末に殺し合ったと思われる八人は

レティシアが殺したのだ。

ニコラはその目撃者だが、彼はそのことを誰にも言わなかった。警察にも黙っていた。

ニコラの足の怪我也実はレティシアが撃つたのだ。それを言わなかったのは口止めされたせいもあるが、真の理由は別にある。

ニコラ自身にも失業者を殺そうとしていた弱みがあったからである。

決して無理やり仲間になされたわけではない。彼は自ら進んでデュークの誘いに乗ったのだ。

しかし、十四歳の彼は年上の仲間たちから邪険にされており、使い走り程度の扱いだった。

ニコラはそれが不満で自分にも解剖をやらせるとデュークをせっついていたが、年下だった彼は一番後回しにされて、結果的に誰も殺すことはなかった。

そしてレティシアが四人の医学生を殺したことで、世間を騒がせた連続猟奇殺人事件は終わりを告げ、

ニコラは大学を去ったのである。

そのニコラがわざわざ自分に会いに来たことを、レティシアは単純におもしろいと思っていた。

どんなに賢^{さか}しくても性格が悪くても、人殺しまで企んだとしてもニコラはまだ十四歳の子どもである。

それを思えば、あれだけの体験をしながら、よくまあ身一つで自分の前に出てこられるものだ。

玄関を出ると、外はとつぷり陽が暮れていた。

「で？ 何の話だ」

ここでもさんざん躊躇^{ちゅうちゆ}ったあげく、ニコラは意を決したように切り出したのである。

「父が……脅^{おど}迫^せされてるみたいなんだ」

「誰に？」

間髪^{まは}容れずに問い返されてニコラは面喰^{めんく}らった。虚^{きよ}を衝^つかれて、へどもどと口籠^{くちご}もる。

「そんなの……わからないよ」

「わからないのに何で脅^{おど}迫^せされてると思う？」

「それは……父親の態度が変だからさ」

「どんなふう？」

いきなり話の核心に迫られてニコラは戸惑^{とどろ}ったが、躊躇^{ちゅうちゆ}いがちに言った。

「父親が……携^た帯^{たい}端^{たん}末^{まつ}を持って寝室から飛び出してきたんだよ。入浴中だったみたいで頭は泡だらけで、バスローブにスリッパだった」

レティシアの感覚では——もつとも彼には父親の記憶などないのだが——どこにでもいるお父さんの姿に思えたので、率直に尋ねた。

「つまり普段はそういうことをやらないわけだ？」

ニコラはものすごく真面目に答えた。

「絶対にね。同じ家に住んでるけど、ぼくは父親の寝間着も見たことがないよ。両親の寝室の奥にはバスルームがあるから起き抜けに他のを使う必要がないんだ。そのくらい几帳^{ちやう}面^{めん}なんだよ」

それは神経質と言ったほうが適切な気がするが、レティシアは黙って話を聞いていた。

「最初はどうかと思ったかと思ったよ。びしょぬれで飛び出してきたと思ったらぼくが廊下にいたことも

気づかないで仕事部屋に飛び込んで鍵を掛けたんだ。仕事部屋は防音対策が万全だから」

「つまり家族には聞かれたくない話だったわけだ。

順当に考えると女でもできたんじゃないか？」

「だとしても……普通のつきあいじゃないと思う」

女云々うんぬんは深く追及せずニコラは言った。

「第一、父親は仕事と私生活を分ける主義で、家にいる時は携帯端末は使わないんだよ。なのに、それ以来しょっちゅう連絡が来るんだ。そのたびに仕事部屋に行つて話してる。普通じゃないよ」

「ふうん。まあいい。とにかくおまえは親父さんが脅されると確信したわけだな」

ニコラは黙つて頷いた。

「脅迫の材料ネタは？」

今度は首を振る。

知らない——もしくはわからないという意味だ。

「親父さんが要求されてるのは金か？」

ちよつと沈黙して、また首を振る。知らないけど

多分違うと思う——という意味らしい。

「親父さんに直接訊いてみるつてのは？」

ニコラは露骨に馬鹿にしたような顔になった。

訊いたところで言うんでも思つてるの？ と眼が

語つていたが、慌あわてて視線を逸らした。

「どうして警察に相談しない？」

ニコラはちらつとレティシアを見た。どこことなく非難するような眼差しである。

察してくれてもいいだろうという顔つきだ。

俺はそこまで親切じゃないんだけどなどと思いつつ、

レティシアはその点を指摘してやった。

「あの事件のことなら親父さんとは関係ないだろう。

それともばれるのが恐いのか？」

ニコラは馬鹿にしたような顔になった。

「セム大の事件に関して言うなら、ぼくはあくまで被害者なんだから、そんな心配はしてないよ」

「じゃあ、なんでだ？」

「それは……」

「親父さんが脅されてるネタが表沙汰おもてざたになるのは
まずいってことか？」

「そうだよ」

わかつてるなら早く答えろよ——とニコラは少々
苛立っている様子だったが、すぐ神妙な態度に戻る。

「今も言ったように世間には知られたくないんだよ。
それでその……相談なんだけど……」

「相談？」

「そうだよ」

「おまえが俺に？」

ニコラは恐る恐る頷くと、あくまでレティシアを
見ようとはせずに本題に入った。

「誰か紹介してもらえないかな」

「誰かって？」

「だから、何ていうか、こういうことに慣れていて、
秘密厳守でうまく処理してくれる人だよ」

説明を聞いても意味不明である。

レティシアはその気持ち正直に態度に表して、

肩をすくめた。

「おまえが何を言いたいかわかんねえんだけど、
なんで俺に訊くわけ？」

「だって——レットの専門じゃないか」

「はあ？」

「きみのことだから、その手の人たちに知り合いが
たくさんいるんだろう」

「その手の人たち？」

ますますもって理解不能だ。

ニコラは言うべきことは言ったとばかりに頷いて、
期待を込めた眼でレティシアを窺った。

どうやらこれで通じたと思ひ込んでいたのだが、
レティシアはわけがわからず眼で疑問を投げかけ、

ニコラはひたすら眼で答えを求めている。

何やら怪しげあやな見つけ合いとも取られてしまうが、
このままでは埒うちが明かない。

レティシアはニコラの態度と突拍子もない言葉の
数々から、相手の言いたいことを推測してみた。

「おまえさ、ひよつとして俺を犯罪組織の構成員かなんかと勘違いしてねえ？」

ニコラの眼が丸くなる。

「……違うの？」

「当たり前だろう。だったらおんびり高校生なんかやってねえよ。せつせと人殺しに精を出してらあ」

ニコラが飛び上がった。

他の少年が言えは質の悪い冗談ジョークに過ぎない台詞せりふも、レイシアの口から出ると洒落しゃれにならない。彼には本当にそれができることをニコラは知っている。

「そんなわけでご期待には添えねえわ。じゃあな」

「待って！」

話を切り上げようとして背を向けたレイシアに、ニコラが叫んだ。

「頼むよ！ 頼むから——」

面倒くさそうに振り返るレイシアに、ニコラは絞り出すような声を掛けたのである。

「助けて欲しいんだ」

予想だにしない言葉だった。

滅多に物事に動じないはずのレイシアが、この時ばかりは思わず眼を見張ったくらいだ。

しかし、うつむいていたニコラにはレイシアの表情の変化はわからない。

「俺に？」

下を向いたままニコラは黙って頷いた。

「わっかんねえなあ。おまえ、俺が恐いんだらう」

「恐いよ……恐いに決まってるだろ」

「なんでその俺に頼むかね。そのくらいなら警察に行けばいいじゃん」

「それができるくらいならとつくにやってるよ！ 警察に行けないから頼んでるんじゃないか」

その言い方で頼んだことになると思ってるのかという至って常識的な突っ込みはひとまず横に置く。

「さっき報道でやってたが、親父さん、心臓発作を起おここして入院したって？」

「嘘うそだよ。倒れて入院したのは本当だけど……」

心臓発作ではなく心労から倒れたのだという。

「その脅迫のせいかな？」

ニコラは黙って頷いた。

「それでも警察には言えないのか？」

また頷く。

「どうしてだ？ 倒れるくらいだから、親父さんは

かなり追いつめられてるんだらう」

「言ったら……父親が警察に逮捕されるよ」

「そうなのかな？」

「そうだよ。あの怯えようは普通じゃないもん」

ニコラがレティシアを頼ってきた理由が何となく

理解できた。

自分たちはいわば同じ秘密を共有する間柄である。

父親が抱えている問題も秘密裏に処理しなければ

ならない。ニコラは恐らくレティシアならそうした

裏の世界に伝つたがあると考えたのだろう。

考え違いもいいところだが、レティシアは真顔で

言い論さとした。

「わかんないぜ。脅迫にもいろいろ種類があるんだ。

首に爆弾つけられて銀行強盗をさせられた例もある。

向こうは単純に警察に話したら親父さんを殺すとか、

家族に危害を加えるって脅してるのかもしれないぞ。

それなら警察を頼るのは有効な手段じゃないのか」

「違うよ。そういうのじゃない。父親は何か弱みを

握られているんだと思う」

「けど、どんなネタで脅されてるか知らないんだろ。

なのに、のっけから警察はだめって決めつけるのは

おかしくねえ？」

「父親の様子を見てればわかるよ、そのくらい」

苛立たしげな口調だった。ついつい上からものを

言う態度になるのはもともとこの少年の性分だろう。

そんなこともわからないのか、馬鹿だなあ——と、

ともすれば顔に出そうになるのを、相手が誰か思い

出す度に慌ててあらためている。

その上でニコラは正直な心情を吐露した。

「とにかく……放っておけないんだよ」

「なんでだ？ 脅迫なんて応じるか突っぱねるか、普通どっちかしかないぜ」

「だからどっちもまずいんだってば。突っぱねても応じても父親の命に関わる問題になるんだから」

「そうなの？」

「わかんないけど……多分」

「親父さんが死んだら困るわけ？」

誰にとつても当たり前前すぎる質問をレティシアは至極真面目に問いかけ、答えるほうも真剣だった。

「困るよ。すごく」

「だったら話は簡単だ。警察に全部話せばいい」

ニコラはまた反射的に蔑むさげすような顔になりかけた。

これだけ言ってもわからないのかと嘲る顔あざけだが、大急ぎで自分の表情を修正した。

「あのさ、死ぬよりは逮捕されたほうがましだって言いたいのもかもしれないけど、そう簡単じゃないよ。

父親がどんな弱みを握られてるのか知らないけど、かなりまずいことだと思うんだ」

「そりゃあそれなりの地位にある親父さんが心労で倒れるくらいだから、やばいんじゃないの？」

ざっと考えつくのは汚職、女性関係、悪くすれば過去の犯罪歴——それこそ殺人などだ。

ニコラは慎重に話し続けている。

「ぼくは別に父親が聖人君子だなんて思っていないし、正攻法だけで今の地位についたとも思っていないよ。

だけど、父親の醜聞が明るみになるのは困るんだ。父親が世間に糾弾されることになる」

「親父さんが死ぬのは困るけど、それと同じくらい親父さんの評判が地に墜ちるのも困るわけだ？」

「当たり前だろ。父親が失脚したら、ぼくと母親が路頭に迷うじゃないか」

レティシアが微笑したのはこの恐ろしく利己的な主張にではない。

十四歳で『路頭に迷う』なんて言葉を使えるとは、さすがは十二歳で大学に入った秀才だと思つたのだ。

「要約すると、親父さんが誰かに脅迫されている。」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。